

題目 議論フレームの違いが多様な主体の受容に与える影響の検討:除去土壌問題を題材とした
集団討議実験

氏名 植 穂奈美

指導教員 大沼 進

本研究では、除去土壌の県外最終処分・再生利用を巡る問題を題材として、議論フレームが多様な主体の受容と手続き的公正、分配的公正に影響を与えるかを検討するために集団討議実験を行った。国は国民的議論が必要としているが具体的な議論の場の設計には至っていない。除去土壌県外最終処分は法律で定められているものの、福島県に置いておくべきだという論も聞かれるため、その是非について議論する場面を想定した。本研究では、議論をした参加者だけでなく、これまで負担を引き受けてきた福島県の人々と、これから新たに負担を引き受ける地域の人々が受容できるかに焦点を当てた。

実験では、議論フレームを操作した。意見の違いが明確であり、賛成/反対の二分法を軸として、結論も二分法的になるような話し合いを行う係争的なフレームと、意見の違いはあっても、互いの立場について吟味し、様々な価値観を結論に取り込むことができるような話し合いを行う包摂的なフレームを比較した。参加者は4人一組の集団で討議し、除去土壌の県外最終処分の是非について決定した。条件別、結論別、参加者の初期意見と集団の結論の相違別に、手続き的公正、分配的公正、受容に差が見られるかの分析を行った。

条件別での結果は、手続き的公正に関しては「議論の独占」のみが、分配的公正に関して「平等原理」と「結論の総合評価」で、受容に関して「大熊・双葉の受容」で条件差が見られた。結論別にみると、結論が県外最終処分に肯定的となった組では、「新たに負担を引き受ける地域への慮り」、「新たに負担を引き受ける地域の受容」で条件差が見られ、係争条件の方が包摂条件よりも低かった。結論が否定的となった組では、「大熊・双葉の慮り」で条件差が見られ、係争条件の方が慮っていなかった。結論が肯定的／否定的のどちらになった組でも、包摂条件では今まで負担を負ってきた／今後負う人々を慮った結論になったためと解釈される。参加者の初期意見と集団の結論の相違別では、自分の初期意見と集団の結論が異なった人たちは、自身の受容が係争条件に比べ包摂条件の方が高かった。これは、包摂条件の方が初期意見と集団の結論が異なったひとの意見も部分的に取り入れられたからであると考えられる。市民参加の場の設計に際し議論フレームに留意する必要性が考察された。